琉球大学学術リポジトリ

修了生・在学生から見た教員養成系大学院の教育 ー授業を中心にー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1081

修了生・在学生から見た教員養成系大学院の教育

―授業を中心に―

藤 原 幸 男

A Questionaire Study of Graduate School Education in Teachers College from student's eyes
― concerning Teaching ―

Yukio FUJIWARA＊

(Received October 31, 1994)

はじめに

1990年（平成２年）４月に設置された琉球大学大学院教育学研究科は、教員養成系大学院として、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）を適用して、沖縄県教育委員会より派遣枠10名を確保して、現職教員院生（以下、現職教員と略）を学部卒院生（以下、学部卒と略）と一緒に教育してきている。調査時点までは、現職教員と学部卒の割合は約４：５であり、現職教員が比較的多く在学している。現職教員の職業的専門能力の向上をも視野に入れた大学院教育が課題であり、担当教官もこの課題を試行錯誤で追求している。(1)

琉球大学大学院教育学研究科では、県教育委員会で推薦者をしぼりこみ、推薦者のみが入学試験を受けるという入学試験システムをとっていない。所属長の受験承諾書があれば自由に受験できる。そのために多くの応募者がある。とくに学校教育専修では高倍率である。教育委員会から勧められて応募したという受験者もいるが、多くの受験者はもっと研究したいという研究意欲に燃えて自主的に応募している。この点で、他の教員養成系大学院の場合とかなり異なっているといえる。学部から進学した院生も、研究意欲の比較的高い現職教員と一緒に学んで大いに刺激を受けているし、現職教員を見て将来の教師のあり方、教育研究のあり方も学んでいるはずである。

この間の大学院教育の成果と問題点を明らかにするために、大学院教務委員会委員長・副委員長の経験者を中心にして、教育学部教官５名で大学院カリキュラム研究会をつくり、アンケート内容を検討し、設置後４年が経験しようとする時点（1994年３月）において修了生・在学生に対してアンケートによる意識調査を実施した。アンケート内容は、大学院への期待と達成度、授業とカリキュラム、研究と学習、入試方法についてであり、大学院教育全般に関わる。(2) アンケート回答はすべて文章記述を求めた。回答者は該当者91名中57名で、回収率は62.6％（現職教員は該当者40名中27名で69.2％、学部卒など〈その他を含む〉は該当者51名中30名で57.7％。修了生は該当者55名中36名で65.5％、在学生は該当者36名中20名で55.6％）である。文章記述による回答を求めたにしては、この回収率は低いとはいえず、文章記述も熱心に書かれており、関心の高さを伺わせるものとなっている。本稿では、藤原の担当したカリキュラムの箇所に限って報告する。

1　教員養成系大学院のカリキュラム

報告する前に、教員養成系大学院のカリキュラム構想について概観し、琉球大学大学院教育学研究科のカリキュラムの位置づけをしておく必要があるだろう。そこで、琉球大学教育学部に送られてきた、全国の教員養成系大学院（修士課程）の「大学院学生募集要項」および「大学院案内」を調べた（平成５年度現在設置39大学中27大学）。

まず、現職教員の受け入れに関してだが、「募

＊ Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.

集要項」において現職教員等の受け入れ枠が明記されているものがあった。兵庫教育大学大学院、鳴門教育大学大学院、上越教育大学大学院では募集人員全体の３分の２程度を受け入れ枠とし、平成３年度以降設置された信州大学大学院、滋賀大学大学院、島根大学大学院(以上平成３年度設置)、福井大学大学院、香川大学大学院（以上平成４年度設置)、山形大学大学院、和歌山大学大学院、佐賀大学大学院（以上平成５年度設置）では、募集人員全体の３分の１程度を受け入れ枠とする、と明記している。琉球大学大学院では、「募集要項」には明記していないが、県教育委員会より派遣枠10名を確保しており、追加３専修が設置されるまでは定員20名中10名で、２分の１の受け入れ枠となっている。この時点では、受け入れ枠は比較的多いといえる。実際には、さきにふれたように、学部卒の定員以上の入学により現職教員と学部卒の割合は４：５となっている。

設置認可者の意向としては、教員養成系大学院におけるカリキュラムは、大枠としては、学校教育に関する科目を４単位履修させ、さらに、教育実践に関わって深化・発展させる科目を設定して履修させることが望ましいとしているようである。ただし、カリキュラムの具体的な構成は各大学院に任せられている。工夫してユニークなカリキュラムを構想しているところもあるが、他方、近年において、特定大学院をモデルとしてカリキュラムを模倣し、安易に大学院申請している気配も感じられる。

大学院研究科共通必修科目についてみると、第一のタイプとして、共通必修科目を開設せず、学校教育専修の専門科目から選択履修させている大学院がある。これは比較的早い段階で設置された大学院に多い。これに近いのだが、学校教育専修だけ共通必修科目を設定して、教科教育専修には学校教育専修の科目から自由に選択履修させているところもある。第二のタイプとして、「教育学特論」「教育心理学特論」をそれぞれ２単位ずつ必修としている大学院がある。このタイプには、必修科目に特色を出している大学院もある。たとえば、愛媛大学大学院では、「道徳教育の総合的研究」「生徒指導の総合的研究」をそれぞれ２単位ずつ、島根大学大学院では、「教育原理特論」「教育内容・方法特論Ⅰ」をそれぞれ２単位ずつ必修にしている。第三のタイプとして、選択必修を取り入れている大学院がある。兵庫教育大学大学院、鳴門教育大学大学院、上越教育大学大学院では、教官スタッフが多いためか、いくつかの科目群を設定して、そのなかから選択必修させている。和歌山大学大学院では、「学校教育総論」（４単位）を履修した上でだが、「環境教育総合研究」「生涯学習総合研究」「教育情報科学総合研究」のなかから２単位選択必修としている。島根大学大学院も、「教育原理特論」「教育内容・方法特論Ⅰ」（各２単位）を取った上で、「道徳教育特論」「教育心理学特論」「発達心理学特論」「障害児教育特論」１科目２単位選択必修としている。

教育実践に関わる専門的能力の向上をめざした科目についてみると、熊本大学大学院以降、琉球大学大学院、滋賀大学大学院では、この種の科目として「教材開発」「授業研究」が設置されている。名目上は附属学校・センターと協力して行うとなっているが、実際には協力関係が困難で、それぞれの担当教官が独自に行っているようである。学校教育専修では、教科教育専修の開設する「教材開発」「授業研究」を履修させているところ（滋賀大学大学院）と、学校教育専修で教育学・教育心理学にひきよせて独自に行っているところ（熊本大学大学院、琉球大学大学院）とがある。山形大学大学院では、「教材開発」「授業研究」という名称でなく、「教育実践研究特論Ⅰ」「教育実践研究特論Ⅱ」という形でセンター提供で開講している。山口大学大学院では、「学校教育実践研究」（学校教育専修）・「教科教育実践研究」（教科教育専修）という形で開講し、「学校教育実践研究」では「授業研究方法論」「教育相談・カウンセリング」「特別活動・生徒指導」を主にした同名称の授業科目の中から一科目選択履修させている。

２　琉球大学大学院教育学研究科のカリキュラムと質問事項

こうしてみると、同じ教員養成系大学院カリキュラムといっても多様な試みが存在することがわかる。そのなかで琉球大学大学院教育学研究科では、教員養成系大学院のカリキュラムとして、教育の基礎に関する科目(「教育原理特論」「教育・

発達心理学特論」）が設定され、また琉球大学大学院の特色科目として、教育実践に関する科目（「教材開発」「授業研究」または「教育実践の研究」）が設定されている。上記1でみたように、琉球大学大学院では、共通必修科目として「教育原理特論」「教育心理学特論」、教育実践科目として「教材開発」「授業研究」を設定している熊本大学大学院のカリキュラムをそのまま模倣していて、工夫がない。ある意味では教員養成系大学院カリキュラムの典型となっている。

私たちの実施したアンケートでは、カリキュラムに関する事項として、教育の基礎に関する科目（「教育原理特論」「教育・発達心理学特論」）、専門科目、教育実践に関する科目（「教材開発」「授業研究」）、「課題研究」（修士論文の指導）について質問した。その上で、開設希望の研究分野、改善希望の授業科目、履修基準・履修方法について質問した。さらに、教育方法にも踏み込んで、大学院での講義・演習の進め方、教材の選び方、および、現職教員と学部卒院生が授業を一緒に受けていることについて質問した。

実際のアンケート質問は次のとおりである（記入の空欄は省略）

Ⅱ　カリキュラムと教育方法について

1　開設授業科目について聞きます。

①　共通必修科目（「教育原理特論」「教育・発達心理学特論」）はどうでしたか。

②　共通必修科目は、他大学大学院教育学研究科では、総合科目や学校教育専修の専門科目で代替しているところもあります。これについてどう思いますか

③　各専修の専門科目はどうでしたか。

④　教育実践に関する科目として、「教材開発」「授業研究」（学校教育専修では、「教育実践の研究」に改称）が開設されています。この科目はどうでしたか。

⑤　「課題研究」（修士論文の指導）は、どうでしたか（どうですか）。

2　大学院教育学研究科において、開設してくれたらよいと思う研究分野（授業内容）があれば、あげて下さい。

3　大学院教育学研究科の授業科目において、改善したらよいと思う授業科目がありますか。あればその科目の名称と理由を書いてください。

4　大学院教育学研究科の現在の履修科目・履修方法で改善してほしいことがあれば、書いてください。

5　大学院での講義・演習の進め方、教材の選び方などで改善してほしいことがあれば、書いてください。

6　大学院の講義・演習で、現職教員と学部卒学生とが一緒になって受けていることについて、どう思いますか。

このうち1「開設授業科目」、4「履修科目・履修方法の改善」、6「現職教員と学部卒学生とが一緒に授業を受けていること」について、以下で報告することにしたい。

3　教育の基礎に関する科目

この科目は、全専攻共通必修科目である。受講生はさまざまであり、興味・関心は異なる。共通必修科目という性格上、他の科目と比べて、学習意欲は高いとはいえない。また、教える側にとっても、幅広い内容を一人で教えることは困難であり、調査時点までは各々3名の共同担当という形で行ってきた。難しさを抱えた科目である。

①　全体的結果

アンケートの結果（表1）、「原点・基礎の確認という点でよかった」「有意義・有益」「充実・実感」とするものが25／59件（42.4）％あった。比較的多くの学生が良かったとしていることがわかる。しかし注文も結構多く、「学部授業と変わりない・繰り返し」「総論的、広く浅く」という指摘が15／59件（25.4％）あった。このうち「再勉強できて良かった」とする感想も若干あったが、全体として新鮮味のなさ・もの足りなさを訴えていた。少数だが7／59件（11.8％）、「形だけの知識摂取」「意味不明」「理解できない」「わかりやすく中身のあるものにしてほしい」という感想・意見もあった。

「わかりにくさ」については、3名の共同担当によるところが大きいようである。共同担当につ

いての指摘が18／59件（30.5％）あった。[3] このうち、「内容の一貫性に欠ける」「細切れ・中途半端」「焦点が定まらない」など担当者間の調整に関連することについて触れているものが多い。「内容が盛り沢山で、消化しきれない」「レポートが負担」とするものもあった。しかし半面、「さまざまな分野に触れてよかった」とするものもいた。

同じ教育の基礎に関する科目でも、「教育原理特論」と「教育・発達心理学特論」とでは感想に違いがあり、受講生は「教育・発達心理学特論」を印象良く思っている。数名の具体的記述を見ると、前者では、「個人の見解や経験談に終始しがち」であり、「多くの事例をとおして原理を明確化し、考察していくという論証部分が弱かった」のに対して、後者は「つねに事例をとおして心理学の専門的知識を提供していた」こと、「心理学の最近の急速な変化」について講義したこと、さらには、「ゼミ形式で、積極的に学生の意見を求めていた」「臨床的な実習形式を取り入れていた」ことが印象に残っているようである。

(2) 現職教員と学部卒、学校教育専修と教科教育専修の比較

現職教員と学部卒とで比較してみると、現職教員の方が「良かった・有意義・有益」「さまざまな分野に触れてよかった」とするものが約２倍多かった。「総論的・広く浅く」の内容であっても、現場経験を経て、授業内容に納得がいき、実感できたのであろう。そのせいか、内容についての批判的意見は学部卒13／24件（54.2％）に対して、現職教員７／30件（23.3％）で、現職教員の場合、内容の深さについて厳しく追求しない傾向がみられる。学校教育専修と教科教育専修とで比較してみると、学部卒では、学校教育専修で「良かった・有意義・有益」と「物足りない」が半々で「理解できなかった」が僅少なのに対し、教科教育専修では「理解できない・難しい・消化しきれない」が比較的多い。教科教育専修学生の側の問題として、関心があまりないこと、基礎知識が欠落していることが考えられる。これに対して、現職教員では両専修ともほぼ好意的である。

(3) 他科目による代替について

共通必修科目の学校教育専修専門科目などによる代替に賛成が34／51件（66.7）％あった（表２）。理由として、「自分の興味・関心で選べる」「選択の幅が広がる」という意見の他、「限られた時間を有意義に過ごせる」「研究テーマにそって学習しやすい」というものもあった。「現状でよい」とするものが14／51（27.5％）ある。理由として、「負担には変わりない」の他、「基本が大切」「広い知識の修得」「一つの教育機関として必要」「交流の場として大切」という意見があった。学部卒とくらべると現職教員の方に「現状でよい」とするものが多く、教員養成系大学院における共通必修科目の存在意義を見いだしているように見える。

全体としては代替希望が多いが、「講義内容が充実していれば問題ない」とする意見もある。また、「院生同士の交流の場として重要」とする意見もある。これについては、他のアンケート質問項目での回答にも同様の回答がいくつか見られ、この側面から共通必修科目をみることも重要である。学部卒にも現職教員にも有益な授業内容に改善し、受講生の主体的参加を促し、持ち味をひきだす授業方法がとられれば、現行の共通必修科目でもやっていけるように思われる。この授業内容・授業方法面の改善が困難であれば、代替の方策をとることになろう。[4]

4　教育実践に関する科目

(1) 教育実践に関する科目の概要

教育実践に関する科目は、附属教育実践研究指導センターおよび附属小・中学校の協力を得て、教育実践における理論と実践の統一をはかり、高度な教育実践能力を育成する趣旨で設定された。それぞれの専修で開講されている。当初の趣旨とはちがって、附属教育実践指導センターおよび附属小・中学校の協力を得て実施されているところはなく、また、県外の招聘教授による集中講義でおこなわれているものもあった。

(2) 学校教育専修の場合

学校教育専修では、平成２～３年度において「教材開発」「授業研究」、平成４年度以降からは「教育実践の研究Ⅰ」「教育実践の研究Ⅱ」「教育実践の研究Ⅲ」として実施されてきている。

回答者は、ほとんど「教材開発」の授業につい

て述べている。「教材開発」は10名程度の規模で、しかも小・中・高校（大学）の現職教員と学部卒とが共通の場で学んだ点に特徴がある。集中講義で、教材開発の理論と方法について学習し、多様な着想に気づかせ、教材づくりのイメージを広げた。その上で、時間を置いて各自教材開発にとりくませ、レポートを提出させ、教材開発発表会をもった。（藤原幸男「大学院学生の教材開発」『琉球大学教育学部教育実践指導センター紀要』第1号、1993年10月を参照）

全体的に、学生は「きつかったが、得るものは大きかった」と評価している。現職教員の一人は、「学部からの学生には少し辛かったようである」と述べている。「教材や授業の発想の転換を得られた」「自作の授業を紹介したり、改善するための機会があり、有益だった」「小学校から高校までの実践例が見られてたいへん参考になった」「他の人のアイディアを教育実践に生かすことができるので、良かった」という肯定的な意見が多かった（18／23件78％）。学部卒に「いまさら」という意見が1件、その他の者に「必要性を感じない科目であった」が1件あった（合計で2／23件9％）。実施方法の改善を指摘しているものが3名（3／23件13％）あった。学部卒に比べて現職教員の方が熱い思いをくわしく記述しており、「教材開発」で学んだことは、学部卒よりも現職教員の方が印象深く残っているようである。改善点としては、学部卒に対してこの科目の意義について認識させることがある。それから、実際の教材開発に「取り組む時間がもっとほしい」という感想にみられるように、レポート作成のための時間の確保、2～3名による共同での教材開発の試み、教材開発レポート発表会の持ち方の工夫などがあげられる。（表3）

(3) 教科教育専修の場合

「良かった」「充実していた」「大変参考になった」「勉強になった」という感想も多くある（18／27件67％）が、授業内容について率直な感想と注文・要望も書かれていた（6／27件22％）。担当者の考えによって授業内容が相当異なり、基礎理論の提供か、実際的な方法の訓練か、のどちらかに偏っている。基礎理論を提供した授業では、一方では「現時点での教育傾向を知る・考える手がかりを得た」という感想があり、他方では「理論的な解釈だけ」「理論だけ」「資格のための消化授業」という感想があった。教材開発・授業研究の方法に重点を置いた授業では、一方では「考えるときの視点を学んだ」「すぐに役立つので重要」という感想があり、他方では「指導案にだけ観点を置いている」という感想があった。「現場で実際に試す場もほしい」という感想もあった。なかには、ほとんど自習で不満に感じている感想もある。ごく少数だが、担当教官に「消化授業」という意識が見られると学生は見ている。また、自信がないせいか、県外招聘教授による集中講義で消化している科目もある。この授業科目の当初のねらいを捉えなおし、その上で内容構成をし、担当者としてできるかぎり努力をしてみる必要があるように思われる。（表3）

5　専門科目および「課題研究」（修士論文の指導）

(1) 専門科目

専門科目について、肯定的な評価をしているものが圧倒的に多かった（41／53件で77％）。授業内容に関して、「興味深かった」「新鮮だった」「充実していた」「刺激になった」「有益・有意義・勉強になった」「満足している」とするものがずいぶん多かった。授業の形態・雰囲気については、「少人数での活発な討論」「自由な雰囲気」をあげているものもいた。受講人数も少なく、担当教官は自分の専門内容を話せるし、受講生と討論できるので、多くの受講生は充実感をもっている。（表4）

学部卒とくらべると、現職教員の方に充実度・満足感は大きいようである。「現職で実践を積んでから院での勉強はとてもためになるものばかりです」「内容的には、勉強の手応えを感じるものがあり、充実していたと思います」という感想に注目したい。

授業のレベルに関して、「学生側の興味等も考慮して科目の内容も配慮していただいたので、とても興味深く聞くことができた」とする感想がある一方で、「講師によって、講義内容の充実に差があった」「内容面で物足りなかった」「学部のときと講義内容は変わらなかった」とする感想も

あった（12／15件23％）。担当教官には、学部のときよりも一段と講義の質を高め、内容的充実・向上に努力することが要求されている。（表４）

(2)「課題研究」（修士論文の指導）

「課題研究」（修士論文の指導）については、ほとんどが、熱心に指導していただき満足している、という感想をもっている（47／50件94％）。在学生には、「大変ていねいで適切なアドバイス・指導」という感想があり、修了生には、「充分すぎるほどの指導で、満足」「指導教官の存在なくしては、何ひとつできなかった」という感想がある。学生の研究関心との関係でいえば、数としては少ないが、「学生のやりたいことを汲み取った指導」「自分のやりたい研究ができて良かった」という感想がある。大方において、研究テーマの下請けという感想はみられなかった。指導方法については、専修分野・指導教官によって異なる。「定期的に小括、スムーズにいった」「繰り返しミーティングしていただき、満足」という定期的な指導による方向づけの他に、中には、学生の自主的取り組みにゆだねていて、疑問があったり行き詰まったりしたときにのみ相談にのる、という指導スタイルもみられる。これについては、「マイペースでやらせていただいた」という感想がある。（表５）

現職教員（未修了生）の場合、これまでの「課題研究」での適切な指導とアドバイスによって修士論文への研究が深まったとしているが、その半面、２年目に現場に戻ってからの心配を抱いている。中退者から、「指導教官にも助言や指導力が問われると感じた。『修士論文』というものが片手間にできるような代物ではないことを、学生・学生・教官共々認識してほしい」という指摘があった。この指摘には、謙虚に耳を傾ける必要があるように思われる。（表５）

6　現職教員と学部卒院生が一緒になって授業を受けていることについて

これについては、多くの院生が刺激になって良い、という感想を述べていた（全体で45／53件84％、学部卒20／26件77％、現職教員22／24件92％）。肯定的評価がずいぶんと多かったことに注目したい。そのことを確認しながらも、しかし、実際には、授業運営や授業の深まりという点でみると必ずしもうまくいっているようではなく、今後検討し深めていかなければならないことも多いようである。

(1) 現場経験と共同授業

現場経験と関連づけて討論する場面において、現職教員がしゃべり、学部卒がただ聞いているという状況が見られる。このことに関わって、現職教員は、授業において学部卒の発言が少なく、ともすれば現職教員に圧倒されていることを指摘している。学部卒は、私たちには刺激になってよいのだが、現職教員の方はどうだろうか、と感じている。この点に関連して、現職教員にとって、若い人の意見・考え方に触れることができて良かったという感想がある。（表６）

(2) 専門の知識・論理と共同授業

しかし、専門の知識や論理が問われる授業の場合には、現職教員と学部卒のあいだで落差が生まれてきているようである。現職教員には、研究方法や知らなかったこと、聞き漏らしたことなどを教えてもらって助かった、とする感想もある。学部卒の方では、刺激になって良いことを認めながらも、ディスカッションなどでの困難さを指摘している院生もいる。次のような感想である。「時々、興味や知識量などに違いがあって、とまどうことがあった」「お互いの専門性を活かせる分野においては共にディスカッションすべき。しかし、さらに追求したいときは別々がよい。」「現職教員は現実的で、学部卒学生は頭のなかでの理論上の探究があることを、担当教官は理解して授業内容を進めていく必要がある」「お互いにギャップがあった。フェアにできないこともあった」など。この点では、「実践を積み重ねているかどうかということと、学問的な研究ができるということとはイコールではないと思う」という指摘を踏まえ、学問研究を媒介として刺激し合うということを確認する必要がある。ともすれば、現職教員にあっては、実践経験を披露するか、専門の知識・論理をひたすら学ぶという形になる。実践経験も問い直され、鍛え直されなければならない。専門の知識・論理を吸収して学問的訓練をするとともに、そこに現場経験を活かすようにしていく必要がある。この点がなかなかうまくいかず、学部卒から見て、

「講義している先生方がやりづらそうであった」「実際は、大学の先生方がもっと大変だったんじゃないでしょうか」という感想が出されることになる。質をいっそう高めるための指導性が授業担当者に問われる。(表6)

7　履修基準・履修方法

(1) 履修基準などについて

ア　選択科目・専門科目の履修を多くしてほしい

必修科目を少ないし、選択科目を多くしてほしいという要望がある。大きくは、必修科目を選択必修にし選択の余地をもたせてほしいという方向と、必修科目そのものを少なくし、カリキュラム上の規制をゆるやかにし、学生の選択にまかせるべきだという方向である。後者については、具体的には、「専門科目をできるだけ多く履修できるようにしてほしい。限られた30単位をあらゆる分野からまんべんなく取ると、専門分野の研究の妨げになり、特に修士論文を書く上でも非常に困難」という声に代表される。教員養成系大学院としての理念をどう受けとめるのか、その理念のもとで基礎・基本として共通科目は必要ないのか、修士論文の作成にとってこれらの科目は本当に妨げになるのか、など検討が必要であろう。ただ、学生のあいだに選択志向・専門志向が強いことは事実として認識しておく必要があろう。

イ　他大学院等の授業科目の履修と単位化

これについては、アとも関連するが、修士論文で追求している主題と関連した専門科目が研究科において充分用意されていないなら、他の研究科において勉強したいから履修できるようにしてほしいし、履修したものを単位化してほしい、というものである。これについては、『学生便覧（琉球大学大学院教育学研究科)』において、「教育上有益と認めるときは、他の大学院との協議にもとづき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる」(教育学研究科規程第8条)とあり、可能である。学生の方でできないと思い込んでいたり、指導教官との相談がなされていないように思われる。

ウ　単位数は変えないで、授業時間数を少なく

これについては、大学設置基準が改正になり、演習時間は講義並にすることが可能になった。これにともなって、大学院も学部に準じ、1994年度より演習時間は従来より半減し、負担の減少が実現した。授業への準備・出席に追われるということはやや解消されたように思われる。

(2) 授業開設について

ア　一年前期に授業が集中していて、自分の研究ができない

これについては、たしかに前期に「教育原理特論」「教育・発達心理学特論」があり、また専門科目も前期に集中しやすい傾向にある。しかし反面、後期にはかなり時間的に余裕がでてきて、自分の研究を見つめることができる。現在の前期集中方式でよいのか、それとも前期・後期同じ位の時間負担がよいのか、検討する必要があるように思われる。ただ、忙しいなかでも自分の研究を少しずつでも進めておくことは必要だし、それをやっていくだけの自覚と意思が必要でもあることは指摘しておきたい。

イ　『学生便覧』に上がっていても開設されない科目がある

「分野外で、開設されなかった授業科目があったが、ぜひ開講し、受講の機会があることを希望します」というものである。これについては、その授業科目を非常勤講師で担当しているときには、非常勤手当の確保の問題があり、簡単ではない。非常勤講師の枠が決まっていて、簡単には確保できないことも学生は認識してほしい。このような事情を知らせるとともに、『学生便覧』に「本年は開講しない」「隔年開講」などの表示をしておくことが必要であろう。

ウ　必修科目・専門科目などの夜間開講を望む

「有職者でも履修が用意にできるように、夜間クラスの開設を増やして（設置して）ほしい」「一年目は夜間に授業を受けることができるシステムをつくり、必修科目などは夜間に開講してほしい」というものである。これについては、担当教官のもちコマ負担過重の問題もあるが、入学者が多様化しており、たしかに今後検討していく必要があるように思われる。実際、高校昼間定時制勤務の現職教員も入学し、必修科目が履修できなかったが、勤務形態の変更によって解決したという問題点も生じている。また、県内短期大学教員

の入学もあり、これに対応した開講方法を考える必要があろう。

注

(1)「平成６年度琉球大学大学院教育学研究科（修士課程）案内」には、教育学研究科の目的として、「学部における教育の基礎の上に、広い視野に立って精深な学識を授け、学校教育の場における理論と実践の研究能力や専門性を高め、教育研究や実践に必要な高度の能力を養うことを目的とする」とある。

(2) アンケート作成にあたって、次の先行研究を参考にした。記して感謝したい。

① 佐竹勝利・鳴門教育大学現職教育研究会「鳴門教育大学大学院における現職教育に関する研究ー第一期生への意識調査の結果に基づく考察ー」『鳴門教育大学学校教育研究センター紀要』第１号、1987年。

② 佐竹勝利・鳴門教育大学現職教育研究会「鳴門教育大学大学院における現職教育に関する研究ー第二期生への意識調査の結果に基づく考察ー」『鳴門教育大学学校教育研究センター紀要』第２号、1988年。

③ 佐藤三郎・新井孝喜・樋口直宏「教育系修士課程大学院における教職教育の理念と展開」『筑波大学教育学系論集』第17巻第２号、1993年。

④ 高橋超・石井真治・井上弥「教員養成系大学院における教育効果に関する一研究ー修了者の意識調査をもとにー」日本教育大学協会第二常置委員会編『教科教育学研究』第１１集、第一法規、1993年。

(3) 共同担当については、アンケート実施後の平成６年度より２名ずつ変更されている。「内容の一貫性」「盛り沢山」「レポート多い」などについては、いくらか改善されているように思われる。

(4) 平成６年度前期「教育原理特論」で、Ⅰ教官はグループ活動をとりいれ、グループ調査・発表を中心とした授業をおこなっていて、学生同士の交流を活性化している。この試みは学生に好評のようである。

表１　教育の基礎に関する科目

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
学部と同じ授業内容・他専門科目と重複				4
・学部での講義を復習している感じで、新鮮味がなかった。	1			
・学部での授業とほとんど変わらない内容の授業もあった。	1			
・参考になったこともあるが、総論的であったり、学部の授業と大差ない授業のように感じた。		1		
・内容が「教育原理特論」以外の専門科目とだぶり、同じ内容だった点は改善を要する。		1		
総論的・アウトラインだけ・広く浅く				11
・専門性もあまりなかったので、残念だった。	1			
・アウトラインのみといった感じ。興味のない分野は簡単に済んでよかった。	1			
・「教育原理特論」の授業では、もっと教育学固有の問題を扱ってほしかった。	1			
・学部とはちがい、より自分の興味あるものを深く追求したいと思っていたので、物足りない気がした。		1		
・内容的に浅くなった感がある。		1		
・どうしても内容が浅くなりがちである。		1		
・総論的で多少散漫な印象だったが、すべてが初めて聞く話ばか				

りで、興味深く聞かせていただいた。			1	
・浅く広い知識を得るという点では良かった。	1	1		
・学部であまり勉強しなかった私にとって、概論的な両科目は有益だった。	1			
・現職教員向きに内容を配慮してくださったと思う。		1		
3人による共同担当の問題				18
・限られた時間のなかで3名の教官が教えるのは、内容の一貫性という点では少し疑問が残るが、様々な分野に触れることができて良かった。	1			
・複数の先生方により構成され、様々な視点からのテーマを発見することができ、良かった		1		
・数人の先生方が交代で講義を行うので、さまざまな意見を聞くことができた。楽しく聴講できた。6人6様でとても楽しかった。とても意義のある講義だった。	2	5		
・ティームティーチングの良さが生かされた授業でした。		1		
・それぞれの専門分野を、短い時間で学ぶことができたことは、広い視野が養えたと思う。		1		
・それぞれの専門分野の先端部分が聞けて良かったと思う。		1		
・3人の先生で受け持つことは、ひとつひとつが別々のものになったので、やりづらい面もありました。	1			
・3人の先生が交代で授業をもったため焦点がさだまらなかった。	1			
・内容を絞って各一名の教官が担当してもよかったのではないか。		1		
・複数の教官が担当していたため、その科目の内容の深まりには疑問を感じる。	1			
・3人の先生方が短い期間を受け持つので、細切れで、少し中途半端な感があった。		1		
・「教育原理特論」は講師によって内容の充実にバラツキがあった。	1			
内容が盛り沢山、レポートが負担				4
・与えられた講義時間以上の内容のため、消化しきれない分野もあった。	1			
・レポートについては少々苦労したが、講義内容については、現在の仕事に大変役だった。	1			
・毎週レポートが課されることもあったが、少し負担だった。	1			
・時間的余裕がない現職教諭としては、時間がなく焦っているので、レポート等が負担であった。		1		
書く機会があって良かった				1
・自分なりの意見（感想）を書く機会があり、情報整理ができた。		1		
基礎の再認識ができ、良かった				5
・（学部と同じ内容だったが）結構忘れたりしていたので、もう一度勉強できて良かった。	1			
・素養を深める意味では良かった。	1			

・原点・基礎を認識する上で良かったと思う。	1			
・その後の研究のベースとして有効であった。		1		
・これまで学んできて、忘れかけていたことを再認識することができて良かった。また、深めることもできたと思う。		1		
内容が充実・実感があった				6
・良いと思う。非常に良かった。		2		
・学部のときとはちがい、実感があった。		2		
・「教育・発達心理学特論」は、心理学の専門的部分を省略することなく、常に事例をとおして提供していたことは効果的であった。また、ゼミ形式で、積極的に学生の意見を求めていた点もよく、お蔭で、子どもの発達や心理状態に関して専門的な見地から把握しておく必要性があることがよく理解できた。		1		
・とくに、臨床的な実習のような形式を取り入れたカウンセリングの講義と、心理学の急激な変化についての講義が非常に印象に残っているし、現在の自分の仕事にも生きていると思う。		1		
・特に具体的な授業を扱ってくれたことは、良かった。		1		
理解できなかった・形だけの知識摂取				7
・興味のない分野は簡単にすんでよかった。	1			
・「教育原理特論」の授業については、内容はあまりわかりませんでした。	1			
・必要だと思うが、この必修科目の授業というのは、あまり身に入らなかった。形だけの知識の摂取という感じがした。	1			
・振り返ってみて、「この授業で何を学んだのか？」という感じがする。	1			
・わかりやすく中身のあるものにしてほしい。	1			
・「教育原理特論」は、今更という感じ。	1			
・「教育原理特論」はほとんど意味不明。		1		
この点の改善を				2
・原理を多くの事例をとおして明確化し、考察していくという論証の部分が弱かった。個人の経験談に終始しがちであった。	1			
・テーマが特定化している傾向を感じました。もう少し広いテーマを取り扱ってはいかがでしょうか。最近のテーマも含めて。		1		
院生の交流の場				1
・共通必修科目の授業が、院生の交流の場であった。その意義は大きかった。		1		

表2　共通必修科目の代替

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
賛成				34
・良いと思う。	3	10		
・自分の希望で学べるので良いと思う。	1			
・選択の幅が広がると思う。	3	1		
・選択の自由度が高い方がよい。			1	
・興味あるものを選択できるのでとてもよい。しかし反面、偏りのある選択になるかもしれない。広く学問の動向を知る上では上記の科目もあっていい。	1			
・院生にとって、限られた時間を有意義に過ごせる。	1			
・専門科目で代替する方がよい。	2			
・専門科目を増やし、選択の幅を広げた方が良い。		1	1	
・専門科目を多く受講したい学生には好都合かと思う。	1			
・学部のときに教育学を勉強している人にとっては、専門科目で代替する方がいいと思う。	1			
・同様の内容であればよい。	1			
・「教育原理特論」は代替にしてよいのではないか。	1			
・私自身は専攻分野と重ならないので、別に構わない。	1			
・学生にとっては、研究テーマにそって学習しやすいといえる。	1			
・よくわからないが、その方が修士論文（自分の研究）に結びつけやすいかもしれない。		1		
・希望するものがあれば、それもいいと思う。		1		
・午前の１・２時限に設定されているために、昼間勤務の現場教師は永遠にとれないことになる。専門科目での代替を許してもらえれば､時間割の融通は専門科目の教授と相談して何とかやっていけると思われます。		1		
現状でよい				14
・必要ないと思う。	1			
・今のままがよいと思う。		4		
・単位修得という負担には変わりないので、現状でも大丈夫だと思う。	1			
・共通必修科目は、同学年の顔を知るきっかけにもなるのであった方がいいと思います。	1			
・他の専修の人達との交流の場が確保されるというメリットがあると思う。実際、ひとつの共通の講義内容について、批判の立場であれ、賛成の立場であれ、それで多様な議論が起こり、他の分野との交流がもてた。それと、学校教育専修であれ、教科教育専修であれ、その基礎的な力量の養成をめざす分野として発展する可能性があるのではないか。	1			
・他の専攻の方々の考え方を知る良い機会でもあった。		1		
・「基本が大切」という意味でそのままにしておいてもいいのでは。		1		

・必ずしも明確な目的を持っている者ばかりではないし、広い知識を身につけることも重要だと思われるので、共通の科目も必要ではないか。			1	
・大学院も一つの教育機関であってみれば、やはり、共通必修科目を、そのレベルで設置する方が望ましい。		1		
・現場の教師にとって、もう一度「教育」について学んでほしいので、代替してほしくないと思う。		1		
・私の場合は、必修だから勉強する機会が得られて良かった。必修でなければとってないと思う。		1		
その他				3
・今後の進路として教員になるならば、共通必修科目も絶対に必要だと思うが、総合科目や学校教育専修の専門科目を充実させたいと思っているならば、代替することも有効だと思う。	1			
・共通必修科目も意義があるので、それも併せて開設した上で、代替も認めることができればよい。		1		
・内容次第。		1		

表3　教育実践に関する科目

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
学校教育専修				10
・楽しく受講できた。	1			
・実践場面とのつなぎになると思う。	1			
・少しきつかったが、この授業をとおして得るものは多かった。	1			
・実践に関わったことのなかった私には、大変有益だった。	1			
・将来的には、大学院生（現職教員を除く）の教育実習も必要になるのでは？	1			
・良かった。特に教材開発は他の人々のアイディアを教育実践に生かすことができるので良かった。もっとあってもいいと思った。	1			
・自分の研究が教育実践とどう関連しているか、させないといけないか、ということを考えるきっかけとして良かった。	1			
・教材開発など、教師側が積極的に自分自身の教科指導の点検、確認、向上を考える上で必要なものと考える。	1			
・もうちょっと「教材開発」についての実践的に取り組む時間を設ければいいなーと思います。	1			
・大学院生はもっと専門性をもっていいのでは、自分の研究に（特に現場から言った先生はそう思うのでは）。「いまさら」。	1			
・楽しくできました。		1		13
・私たち実践者は授業で勝負するのが大切であり、その講義で自作の授業を紹介したり、改善するための機会があり、とても意義があった。	1			

・小学校から高校までの実践例が見られて大変参考になった。ただ学部からの学生には少し辛かったようである。		1		
・授業を作って発表会がおこなわれたので教材開発ができた。残念なことは、1日で発表を消化するのはもったいない（もっと意見交換が必要)。二日に分けた方がよい。		1		
・教科教育のそれぞれの教授にやってもらうようり、藤原方式のように、一人の教授でやってもらった方が他教科の先生方のアイディアも盗めるし、教材や授業の発想の転換という立場からも良いと思います。		1		
・大変良かった。学校現場では、「教材開発」や「授業研究」という言葉は多く使われているが「それは一体何なのか」といった概念の問題や方法の問題が研究されていない。そういう意味で新鮮であり、大変勉強になった。		1		
・現職教員にとって大いに有意義。 私達現職からすると、日頃の教材研究のあり方を振り返る機会が得られ、良かったと思う。また、若い人たちの発想の良さに感服した。		1		
・学校教育の実践に直接結びつくものであるから、見直したり、研究を深める上でも大事だと思う。		1		
・現場の悩みを最大限解決していこうとする狙いで取り組めばさらに価値が増すものと思う。		1		
・とても勉強になりました。ただ、実践授業（実証授業）とセットしてもいいのではないかと思いました。		1		
・学校現場で実践できるような科目内容と整合性のある研究内容がほしかった		1		
・良い講義だと思うが、厳しかった。		1		
・障害児教育コースでは、教育実践の研究が2年次の履修（2単位）であるために、現職教員の場合、2年次に現場での授業をしながら受けなければならない不便さが現れてくる。1年次で履修できるような配慮が必要と感じた。		1		
・あまり必要性を感じない科目であった。しかし、受講してそれなりの意義はあった。			1	2
・課題が大変ではあったが、自分のものはともかく、他の学生のレポート、そのための発表会など、勉強になった。			1	
<u>教科教育専修</u>				12
・良かった。	1			
・教えるということが仕事になるので、この科目は必要だと思います。うまく効率よく教えるということを深く考えさせられました。	1			
・現時点での教育の傾向を知る良い手がかりになると同時に、これからのことを考えさせられる授業でした。	1			
・両方とも、教育現場ですぐに役立つので重要だと思う。	1			

・「教材開発」「授業研究」も型にはまった授業ではなく、自分の好きな本を利用して、それから教育の問題を考えることができたので良かった。しかし、理論的な解釈だけだと、現場（現実）とのズレを見失う恐れがある。	1			
・教科名のイメージからして実践的な学校教育に関連した授業という感じだが、全く関係なかった。資格のための消化授業という感じ。だが、個人的にはおもしろい授業だった。	1			
・「教材開発」では、講師の用意した参考事例だけでなく、学生がレポートした事例を含めて検討していくというものだと更に良いかもしれない。「授業研究」では、そうした点ができていた。しかし……。	1			
・「教材開発」はM氏の授業であり、感想は先述の通り。「授業研究」は集中講義であったが、特に不満はない。	1			
・修士論文の素材となる題材を教えてもらった。大変参考になった。	1			
・「教材開発」……受講者に現職教員もいたので現場での実践の話が聞ける機会があり、良かった。「授業研究」……参考になる文献をいろいろと読むことで進められたが、今ひとつ焦点がしぼりきれないまま終わったようだ。	1			
・今、生徒へ教えるときの視点としてとてもいい影響があった。できれば、現場で実際にどう生かせるか、ためす場もあればと思う。改めて、現在教員現場で行われている内容について、自分なりの考え方や案を検討することができたし、他の人の考えも聞く機会が得られて良かった。	1			
・教材開発といえども指導案にだけ観点をおいてあると感じた。実際に現場で用いている教科書、教材のことまで踏み込んでいかないといけない。ただ理論だけをマスターしていると思う。ことに家庭科では、その多くが実習である。大学院を卒業しても実習でスムーズな授業ができるかといえばおそらく無理だと思う。	1			
・「教材開発」が実践的なものでなかった。		1		11
・充実していた。教材開発は集中講義であり、じっくり、時間をかけて学びたかった。		1		
・「教材開発」……ほとんど自習 「授業研究」……授業論、方法論を系統的に学ぶことができ、非常に有意義であった。「教育実践の研究Ｉ」……校種、教科を越えてのさまざまな実践に触れ、得るものが多かった。		1		
・学ぶ面が多く現場での活用に役立っている。		1		
・勉強になった。		1		
・現場でまとめることができなかったものがある程度まとめられた。		1		
・外国の文献に触れることができ、良かったと思う。		1		
・今も現場で生かしている。ぜひそのままあった方がいい。		1		
・現在、教員として教育活動をしている上で、両科目で学んだこ		1		

とが確実に生きている。				
・特にFCAIのソフトを使っての教材開発は教育実践にも生かされた。		1		
・指導教官が院生の要求に応えてくれたので良かった。		1		
・実践的研究までは結びつかなかった。			1	1

表4　各専修の専門科目

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
良かった・充実していた・勉強になった				41
・非常に興味深かった。	1			
・良かった。	5	3		
・充実していた。	4	3	1	
・刺激になった。	1			
・大変勉強になった。		3		
・得るものが多くあり、とても満足している。	1	1		
・集中講義で外部の教官を招聘するのは刺激があって良かった。	1			
・学生側の興味等も考慮して科目の内容を配慮していただいたので、とても興味深く聞くことができた。	1			
・原書を読んだり、お互いでまとめて発表したりできてよかったのではないか。	1			
・今まで学んだことをさらに深められて、大変興味深かったし、学部のときとちがって、自分から参加していく形で受講できたのでよかったと思う。	1			
・有意義なクラスが多かった。		1		
・実に有意義な講義が多くて、現職教員にとってどれも大切な講義であった。授業改善や授業論など特に、教育の重要である部分を理論的に学習するためのアプローチを得たのは大きなプラスである。自分にとって、授業ということを改めて認識させられた。		1		
・演習と特論の両方とも計画的に設定されており、単位修得の見通しを立てて登録することができた。		1		
・大学時代の講義とちがい、現職で実践を積んでから院での勉強はとてもためになるものばかりです。とくに、ゼミ形式がよい。		1		
・久しぶりに専門の勉強をしたので、新鮮だった。		1		
・教育学そのものが初めて学ぶ学問だったということもあり、また、それぞれの先生も個性的な方ばかりで、もちろん、内容としても勉強になった。			1	
・現場に戻って、同輩や後輩にもその充実ぶりを大いに語っている。		1		
・現職からすると、現場での研究をカバーするだけの利点があった。		1		
・５人以下の少人数での受講だったが、それぞれの考え方で活発に意見を述べ合うことが多かったので、非常に勉強になった。		1		
・自由な雰囲気で良かった。		1		

・内容的には、勉強の手応えを感じるものがあり、充実していたと思います。		1		
・学部での経験を踏まえて、かなりつっこんだところまで深めることができた。		1		
・とっても良かった。今の仕事を深くみつめ、その知識を生かすことができた。		1		
改善してほしい				12
・講師によって、講義内容の充実にバラツキがあった。	1			
・充実している科目と、そうでもない科目とがあるように思えた。		1		
・とても勉強になったが、1年次はそればかりに追われて、自分の研究に手がいかない感じを受けた。	1			
・充実したものの多くあったが、現職教員との専門性のちがいで不満に感じる点も多かった。	1			
・英文講読が負担になった。しかし量より質を問うなら、英文を時間をかけて読み、そのなかから疑問点や自分の研究に役立つ知識を見いだせる方がよいと思う。	1			
・選択授業が多くても実際に選べる授業が少ない。自由選択科目を増やしてほしい。	1	1		
・現在に比べ、当時は授業科目数が限られ、ほとんど選択の余地がなかったように思う。	1			
・足りなかった（もっと知りたいことがあった）。		1		
・英語教育の科目について、M助教授の授業は、実際の授業が2か月で終わってしまい不満であった。今後の学生の為にも内容のある、実りのある授業をしてほしい。単位はただ取得すればよいというものではなく、意味がなかったと感じるくらいであれば、文学の授業をもっと多く取れるようにしてほしい。	1			
・学部のときと講義内容は変わりなかった。ただ各教官とより親密に話をしたり考えを聞くことはできたように思う。	1			
・洋書講読の科目が少ないような気もする。教官によっては院生のことを考えて意図的に洋書を避けたようなところもあったが、そんな気を使う必要はない。苦労しても洋書が読めるような力をつけるべきである。		1		
・他学部の大学院の授業との互換性がもっと柔軟になればさらに良い。		1		

表5　「課題研究」（修士論文の指導）

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
学部卒（在学生）				7
・適切である。	1			
・大変お世話になっている。	1			

・良かった。	1			
・週２回受けていますが、適切な指導のもと、よくわかるようになり、着実に前進しています。いろいろな本を紹介してくれて、さらに視野が広がりました。	1			
・私のペースに合わせて指導助言がなされてきたので、あせらず、ゆっくりと煮詰めることができたと思う。	1			
・自己の研究内の盲点などを再確認できました。今研究中で、これからも続けて指導してほしい。	1			
学部卒（修了生）				18
・段階的に指導していただき、最終的な段階、つまり提出段階で苦労することが比較的少なかった方である。	1			
・熱心に指導していただき、感謝している。	1			
・指導教官が時間を割いて、充分に指導してくれたので良かった。	1			
・私の研究を踏まえた上での指導教官の配慮があって、非常に研究がやりやすかった。	1			
・自主性を尊重した（させられた）。	1			
・十分でした。	1			
・指導は忍耐強く、常に的確で、私としては最高であったと思っている。	1			
・大変お世話になり、感謝しています。	1			
・基本的に、個人発表をもとに議論を進めていただいた。それで、自由な発想をしていくのによい指導だったと思う。	1			
・ディスカッション方式で、リアルタイムの問題を、集中して指導してもらった。現時点でも、受講してみたい授業である。	1			
・数学は修士論文に関して大きく時間を与えてもらったので良かった。修士論文指導に関しては、修士論文の方向性を模索できるように導く指導がされていたと思う。	1			
・良かった。	1			
・良かった（もっと計画的にしたかった）。	1			
・適時に指導を受けられた。	1			
・実質的な指導の場合、常に学生のやりたいことを汲み取って、その上でアドバイスを与えていたので、その点指導をあおぎやすいし、益になることが多かった。	1			
・卒業論文以上に深く研究でき、くりかえしミーティングしていただき、満足でした。	1			
・自分のやりたい研究ができてよかったが、一期生ということもあって、論文の形式や提出期限等で混乱することが多かった。	1			
・学生個人に力量がないと書けないように思っていたが、指導教官にも助言や指導力が問われると感じた。「修士論文」というものが片手間に書けるような代物でないことを、学生・教官共々認識してほしいと思う。	1			
現職教員（在学生）				10

・良い。		1		
・１年間が終わり、修士論文に本格的に取り組むのはこれからですが、割りとスムーズにこれまでこれたので良かったと思う。自分でやらなければ終わらないと思って、昨今では気を引き締めてやろうと思う。		1		
・大変ていねいに、しかも適切なアドバイスや指導をして下さったり、また参考資料や図書なども紹介して下さった。同時に、学問的研究とはどのようなものかについてまで学ぶことができたような気がする。		1		
・指導教官が常時相談にのって下さるので、修士論文がスムーズに進んでいる。		1		
・定期的に指導してもらい、ありがたかった。		1		
・２年次が心配（現職なので、勤務しながら時間が確保できるかということ）。		1		
・自由にやらせていただいております。		1		
・これからが本番であると思う。来学期よりスタートする予定。		1		
・指導教官と定期的に研究の時間が取れていない。		1		
・５年目に突入している私としては、「テーマが大きすぎた！」「欲張りすぎた！」という気もしないではないが、課題研究そのものについては非常に満足している。大きなテーマを思う存分展開させてくれた指導教官に感謝している。しかし自分の好奇心を充分満足させることができた半面、他への負担が多かった。授業料や時間的な面である。特に時間である。４年以上もいて時間が不足したつもりはないが、まとまった時間（３～４時間以上）がとれなくて困った。特に、昨年は少し油断したら３か月も研究ができなかった。現在の状況はというと、１週間にできるだけ毎日ワープロを覗くことをこころがけている。しかし、30分～２時間程度しかできない。その他に家族の協力をやっと得て週１回、５～６時間を確保できるようになった。修士論文の指導は、こちらの要求に応じて、充分な時間（一回あたり３～８時間）指導してくれているので感謝している。		1		
現職教員（修了生）				15
・充分すぎるほど指導していただいた。感謝している。他大学の大学院の修了生の話を聞いても、琉球大学大学院の論文指導の方法ははるかにすぐれていると思う。指導する院生の人数とも関わることでもあろうが、現状に満足している。欲をいえば、指導教官の研究テーマに共同研究という形でお手伝いさせた方がよいと思う。		1		
・充実した内容で、満足している。		1		
・定期的に小括をし、指導をあおぐことができ、スムーズにいった方だと思う。		1		
・自分の力で論文を書いていく過程で先行研究探しで苦労した。		1		

指導教官は充分に世話してくれた。		1		
・指導というより、自分の研究なので、自分の力が至らなかったと考えている。		1		
・マイペースでやらせてもらい、感謝しています。		1		
・得るものがあった。		1		
・もっと時間がほしかった。		2		
・苦労した分だけ実になった。きびしい先生方の指導は、かえって実り多いものになった。		1		
・本発表する前に、発表する機会がほしかった。		1		
・実験系のため多くの時間と労力を要したが、成就感を味わうことができた。		1		
・指導教授がすばらしかったので、実験方法の他に、統計分野まで学ぶことができて、良かったと思う。		1		
・大変有意義であった。おかげ様で大学院入学の目的がある程度満足いくくらい達成できた。		1		
・良かった。ただ私の研究不足のために指導教官に迷惑をかける部分が多かった。		1		
その他				2
・指導教官の存在なくしては、何一つできなかったということを、今、強く感じている。			1	
・かなり自由に、しかも定期的に議論することができて良かった。			1	

表6　現職教員と学部卒が一緒に授業をうけていることについて

文　章　記　述	学部卒	現職教員	その他	計
学部卒				26
・教育現場のいろいろな情報や、生徒たちの考えや行動など、教員生活を長く勤めたものにしかわからぬ意見が聞け、大いに参考になるので、教員をめざす学部卒学生にとってはプラスになると思う。	1			
・現職教員と一緒になって受けることによって、刺激を得て、いろいろな意味でとても良かったと思います。	1			
・特に、共通必修科目では、学校現場での経験ある現職教員の方が質問・発言が多く、刺激になるので、とても良いと思っている。	1			
・刺激になった。	2			
・大変良いことだと思います。	5			
・お互いが刺激になる。お互いに学ぶところがあってよい。	3			
・学部卒の私としては、とても刺激になり、経験と理論の調和ある討論ができ、良かった。もっと重視してもいいのでは。	1			
・学部卒の私にとっては、現場からの目を知ることができ、良かったが、現職の方々はどう思われるだろうか。	1			
・「教材開発」の授業でしか一緒にならなかったので、何とも言	1			

えないが、おもしろかったです。				
・現場の生の声が聞けて、良い刺激になる。調査に協力してくれる。	1			
・良いと思う。学部卒学生にとって、現職教員の経験談や考え方など、参考になる要素が多い。	1			
・とても良いと思います。学部卒学生だけだと、現場のことが全く（ほとんど）わかりません。現職教員がいるだけで、講義・演習の意見交換など、広がると思います。	1			
・現職での経験談が講義に持ち込まれることによって活性化することもあった。学部卒だけ、あるいはほとんど現職教員で構成される大学院とはちがった、ユニークな側面だと思う。とくに問題はないのではないか。	1			
・双方にとって良い刺激となっている部分が大きいと思う。	1			
・学部卒学生からみた場合、好ましい結果が生まれると思う。	1			
・新しい刺激が得られてとても良いと思うが、時々、興味や知識量などに違いがあって、とまどうこともあった。	1			
・一長一短だと思う。理想的なのは、お互いの専門性を生かせる分野においては共にディスカッションをすべき。しかし、さらに追求したいときは別々がよい。	1			
・両者にとっても刺激になって良いのではないかと思った。ただ現職教員は現実的で、学部卒学生は頭の中での理論上の探究があることを、担当教官は理解して授業内容を進めていく必要がある。	1			
・お互いにギャップがあったと思う。フェアにできないこともよくあった。しかし、これも教育学研究科の特色なのかとも思った。実際は、大学の先生方がもっと大変だったんじゃないでしょうか。	1			
・現職教員の方の熱気に刺激されてよかったと思うことと、実際の現場からの声を聞くことができてよかったが、講義・演習のなかで、現職教員と学部卒学生との間で差がありすぎてこまったこともあった。	1			
・現職教員と話をしたりするいい機会であるけれど、交流がないのでその機会も殆どない。	1			
<u>現職教員</u>				24
・とくに問題はない。別にかまわない。		5		
・良い。とても良い。		2		
・良い刺激が得られてよかった。		1		
・現職の私からすれば、学部卒学生の方々は現場経験がなく、ゼミでも消極的で発言もなく、意見も切り出せないようであった。また、心理学のゼミでも意見を出せずに教授の方々が困っていたようだ。はっきりいって、大学院でのゼミ形式では現職の現場経験が長い方が吸収が大きいだろうと思う。その分、若い学生さんも意見に自身をもって参加しよう。まずは話せることからスタートしたほうがよいと思う。		1		

・お互いに、それぞれの視点から意見交換ができて、充実していたと思う。		1		
・様々な価値観が学べる良い機会であった。（しかし、講義している先生方がやりづらそうであった。）		1		
・特に支障はないと思う。現職教員としては、若い人の意見、考え方に触れることができ、好都合である。		1		
・大変良いと思う。学部学生にとっては現場の状況やいろいろな話が聞ける。それは教師になる前の心構えにもなるだろう。現場教師にとっては、逆に、どのような意識で教師になるのか等々大変勉強になる。また、学部生へのアドバイスができる。		1		
・双方に利点があると思う。世代のちがい、立場のちがいによって、種々の考え方を聞けると思う。		1		
・良いと思う。現職教員は実務経験より、学部学生は新しい感覚の教育をとおして同一課題に対する考え方が対比して見れるから。		1		
・構成比率にもよるかもしれないが、現職にとっても学部卒にとっても利点の方が大きいと思う。ちがう立場で、違う視点をもっていると考えられるから。		1		
・交流がはかれてよい。年齢を越えて互いに得るものがあったようだ。		1		
・良い。それぞれの良さで刺激があってよかったのでないか。		1		
・お互いに刺激し合ってよい。		1		
・大変良いと思います。学部卒の学生からいろいろと教えてもらってよかったと思います。		1		
・私としては、若い学生たちのパワーや考え方が刺激となっていたので、よかったと思う。		1		
・現職教員の私にとって、とても助かっています。研究方法やこれまで知らなかったこと、聞き漏らしたこと、多くのとっとしたことで、学部卒学生との共同授業はとても助かっています。		1		
・実践を積み重ねているかどうかということと、学問的な研究ができるということとはイコールではないと思う。したがって、お互いに励みになるということでは、一緒であるかどうかはあまり関係なかった。		1		
・とてもよいことだと思うが、それぞれの立場（例えば具体的な意見をもつ現職VS理想的な学部卒）を明確にした議論ができなかったことが残念だった。		1		
・現職の先生方にとっては当然のことであっても、現場を知らない者にとっては、未知の知識で、大いに刺激を受け、大変結構であったと思う。			1	3
・非常に良いと思う。お互いの刺激になる部分が多い。			1	
・現職の先生方から、実践的なお話を伺うことができてよかった。			1	